

# なし果実の高温障害対策の徹底について

## — 令和5年産の被害を繰り返さないために —

令和6(2024)年6月26日

安足農業振興事務所

### 1 気象庁3ヶ月予報：7～9月

気象庁の発表によると、7～9月は気温が高く「猛暑」や「残暑」が予想されている（表1）ことから、今年もなしの高温障害対策が必須であり、果樹園ごとにできる対応を徹底する。

表1 関東甲信地方の3ヶ月予報（7～9月）：気象庁6月25日発表

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	10%	30%	60%
降水量	30%	30%	40%

### 2 日焼け等の高温障害対策について

#### (1) かん水を徹底する

- ・降雨が5～7日間ない場合は、適宜かん水を行う。最高気温 35°Cを超える日が連続する場合は、少なくとも2日に1度はかん水を行う。
- ・1日当たりのかん水量は20～30 t /10 a とする（降雨量換算で20～30mm）。
- ・水源がない果樹園は、スピードスプレーヤを使ってかん水する。その際は、「あきづき」などコルク状果肉障害が発生しやすい品種などを優先する。

#### (2) 樹体へ散水する

- ・最高気温 35°Cを超える日は、その日の夕方にスピードスプレーヤで樹体へ散水し、果実温度をできるだけ下げる。散布量は250～300 リットル/10 a とする。

#### (3) 新梢の摘心はやめる

- ・枝葉が少ないと、果実に直射日光が当たり、日焼けを助長するため、これから新梢の摘心や徒長枝のせん除はやらない。

#### (4) 補正摘果を徹底する

- ・果実肥大を促し、日焼けの発生を軽減させるため、改めて補正摘果を徹底する。
- ・補正摘果は日焼けのリスクが高い「上向き果」を徹底して間引く。
- ・陽光面が発達したコルク層で覆われている果実（写真1）は、既に直射日光が強く当たっている証拠であり、日焼け果を防止するため優先的に摘果する。

- ・補正摘果の時期は以下のとおり（表2）。

表2 補正摘果の時期と目標着果数

	補正摘果の時期	目標着果数
にっこり以外の品種	満開後 100 日 (7月 20 日頃)	8 ~ 9 果/m <sup>2</sup>
にっこり	満開後 115 日 (8月 2 日頃)	6 ~ 7 果/m <sup>2</sup>



写真1 にっこり陽光面の発達したコルク層  
(成熟に伴い日焼け果になりやすい)

(5) 除草は控える

- ・夏季は、土壌の乾燥を防止するため、園内の除草を控える。

(6) にっこりは追肥する

- ・果実肥大を促し、日焼けの発生を軽減させるため、7月下旬頃に追肥を行う。
- ・施肥量は、窒素分量で2 kg/10 aとする（例：「硫安」の施肥量 10kg/10 a）。

(7) にっこりは果実袋を活用する

- ・果実の日焼けを軽減するため、7月10日頃までに果実袋の「サンテ」等を被せる（写真2）。
- ・「サンテ」は、一般の果実袋とは異なり、袋の上下が空いているため防除は無袋栽培に準じる。



写真2 「サンテ」を着用した状態  
(日焼け果軽減につながる)

(8) にっこりは葉面散布資材を活用する

- ・果実の日焼けを軽減するため、幼果期に葉面散布資材「こかげ」等を4回程度散布する。
- ・散布時期は、7月中旬、8月上旬、8月下旬、9月上旬を目安とする。
- ・散布にあたっては、資材（商品）の説明欄等で十分確認した上で使用する。

### 3 病虫害防除の徹底

- 今後も高温が予想されるため、ハダニ類やアザミウマ類、カメムシ類などの害虫防除を徹底する。
- 降水量が増加した場合、輪紋病の発生が懸念されるため、薬剤防除を徹底する。特に収穫作業で多忙となる8～9月の防除は手を抜かない。